

鳥取県美術館フォーラム2016 鳥取会場

日 時 平成28年7月10日(日)
午後1時～午後3時
場 所 鳥取県立生涯学習センター
(県民ふれあい会館)

○司会

皆さん、こんにちは。本日は、「鳥取県美術館フォーラム2016 みんなでかんがえる美術館の可能性」に御来場いただきありがとうございます。私は、本日司会を務めさせていただきます佐藤と申します。よろしくお願いたします。(拍手)

初めに、本日の予定をお知らせします。主催者挨拶の後、美術館整備に係るこれまでの検討状況を御説明いたします。その後、世田谷美術館の主任学芸員、塚田美紀様より基調講演をいただきます。そして、その後パネルディスカッションとして会場の皆様の質疑応答を行って、午後3時をもちまして閉会の予定としております。

また、配布させていただいておりますパンフレット等の中にアンケート用紙がございます。今後の参考にさせていただきたいと考えておりますので、ぜひ御記入をお願いしたいと思います。御記入いただきましたアンケート用紙は、本フォーラム終了後に会場出口の受付に回収箱を設置しておりますので、そこに入れていただきますようによろしくお願いたします。

なお、本フォーラム終了後には、受付横のところに置きまして意見・質問受付コーナーと題して、皆様と県立博物館学芸員との意見交換を行います。御希望の方は奮って御参加ください。

また、本日の手話通訳を、公益財団法人鳥取県聴覚障害者協会様をお願いしております。どうぞよろしくお願いたします。

それでは、開会に当たり、主催者を代表いたしまして、鳥取県教育委員長の中島諒人より御挨拶申し上げます。

○中島教育委員長

皆さん、こんにちは。暑い中、ようこそお集まりくださいました。鳥取県教育委員長の中島と申します。

今回、美術館フォーラムということで、過去3回、まず米子で、美術館に期待するもの、倉吉で、美術館と地域づくり、それで最後、3回目で美術館と人づくりということで今回開催されるものです。そもそも何で教育委員会なのかとか、きょうも博物館のスタッフがたくさん出ておられますが、皆様、大体の御経緯は御理解なのではないかと思っておりますけれども、私のほうからも少し御説明をさせていただきます。

皆さん御存じのとおり、まず、県立博物館が昭和47年にできました。私も子供のころでしたが、何となくぼんやり、すてきなものができたなということを思ったのを覚えております。自然、歴史、美術ということで3部門を扱っております。これがいろいろ古くなってきたり狭くなってきたということで、では、どうするかなということで、いろいろなことが話題になってきました。その中で、現施設を今のまま広くすればいいのではないかとというふうに誰もが思うのですが、しかし、あそこが国指定史跡内にあるということで、増築が許可されないということがあって、では、どうしようかということになりました。それで、収蔵庫だけをどこかに建てたらいいのではないかとという話もあったのですが、いやいや、収蔵庫だけということだと結局いろんな不都合も出てくるからということで、昨年度、博物館の現状課題検討委員会というのを開いていただいて、それで、その結論として、御意見として、自然、歴史、美術のどれか一つを外に独立した施設として出したらいいのではないかとということをお願いただきました。その後に県政モニターで県民の方にいろいろ御意見をお伺いする中で、やはり美術館を外に出すということがどうもいいのではないかとということになって、それで鳥取県教育委員会として、ことし、ちょっと長い名前ですけども、美術館整備基本構想検討委員

会というのを今年度の予算でつくっているいろいろ御議論をいただいております、きょうのフォーラムもその流れの中にあるということをお理解いただけたらいいかなと思います。

今、いろいろ議論をしているのですけれども、政治的には、つくるともつukらないともまだ決まっていけないものです。私たち教育委員会としては、つくったらいいなど。そして、つくる以上は、地域にとって意味のあるものをつくりたいなということを考えております。ポイントになるのが、きょうのタイトルですけれども、やはりみんなで考えるということだと思います。そもそも何がよいか、当然皆さん誰でもよい美術館ができたらいとお考えになるのですが、そもそも何をよとするのかということについて、ある程度皆さんで考えを深め、何らかの、ある程度のまとまりを持った考えができることが一番大事なことなのではないかと思っております。各地域のテーマが、期待するものだったり、地域づくりということだったり、人づくりということでも展開してきておりますが、要は、美術館というものが本当に社会のために、私たちがよりよく生きていくことのために役に立つものとして存在するのだとすると、それはどんな姿がいいのだろうかということを、私たちは、市民の、県民の総意としてある程度まとまったものをつくりたいということだと思います。

きょうお話をさせていただく塚田さんのお話も、そういう意味で非常におもしろい事例とかお話が聞けるのではないかなと思っております。まずは塚田さんからお話をさせていただいて、それからパネルディスカッションに移っていきたく思います。

余り長い時間ではないですけれども、終わりのほうでは皆さんにもいろいろ御意見をお聞きする時間も持ちますので、ぜひいろいろ考えを深めていけたらなと思っております。では、きょうはよろしく願いたします。(拍手)

○司会

引き続きまして、鳥取県立博物館館長の大場尚志より、美術館整備に係るこれまでの検討状況を御説明いたします。

○大場館長

皆さん、こんにちは。県立博物館の館長をしております大場でございます。

先ほど委員長のほうからお話がありましたように、この美術館、現在どういう美術館をつくるのがいいのかという基本的な方向性について、美術館整備基本構想の検討委員会というものを設置いたしまして、ここで委員の皆さんにいろいろ議論していただいております。本日は、その議論がある程度方向性が固まってきたので、その内容について御紹介させていただこうと思っております。お手元にこういったパンフレットをお配りしております。これにも記載しておりますが、画像のほうも用意しておりますので、基本的にはそちらで説明させていただきたいと思っております。

まず、今、なぜ美術館が要るのかということでございます。これについては先ほど委員長のほうからもちょっと申し上げました。ここにいろいろ書いておりますけれども、要するに、一番言いたいのは、美術館というのは社会教育施設ということで、人づくりのための施設であるということでもあります。人づくりのために必要だということでもあります。人間活動の文化的な結晶である美術というものに触れる、本物に触れる、そういったことで感動し、刺激され、癒やされる。多様な表現に触れて触発されて、感受性や許容力、想像力といったものが高まっていく。美術館は、そうした気質とか能力、そういったものを育む中核的な拠点施設であろうと思っております。

人口減少時代に入りまして、経済成長というものが至上命題にできなくなってきました。そうした中で、地域社会の維持、存続を図っていくためには、こうした機能の重要性、これが従来以上に高まってきておるといってございまして。こうした機能が不十分な地域というのは、要するに子供たち、あるいは大人もそうですけれども、感受性、許容力、想像力、そういったものを育むための機能が欠けているということになるのだらうと思っております。そういった地域には、その子供の親御さんも、あるいは大人自身も移住してはきませんし、あるいは今いる

人もいずれ出ていくかもしれない。そうならないために、地域が存続し再生していくために必要な社会的なインフラであると。水道や道路と同じように必要不可欠なものであるということで、美術館が必要なのだということだろうと思います。

では、そういった美術館はどういうことを目的に設置するのかということでもあります。一つは、ここにも書いておりますけれども、地域独自の自然風土や歴史文化、それが地域の個性の源であって、住民アイデンティティーのよりどころになっておるという状況を踏まえて展開していかなければいけないと考えております。美術作品といいますのは、それを生み出した時代、地域におけるそうしたものの状況を色濃く反映しております。その意味で一つの文化遺産であります。それをきちんと継承し、次の時代に伝えるのが地方美術館の使命だと考えております。その意味で、ここに書いておりますように、鳥取県にゆかりの独特な美術を中核に据えた展開を図っていかなければいけない。それによって地に足のついた個性を確立していく必要があると考えております。また、先ほど申し上げましたけれども、感受性、許容力、想像力を育むためには、鳥取県ゆかりのものに限らず、内外の多様な美術作品に触れることが重要だと思っております。鳥取にいながらにして、鳥取ではふだんなかなか見られない、そういうすぐれた作品をじかに見る機会を県民の皆さんに提供していく、こういったことも重要だろう。

そういったオーソドックスな目的のためだけではなくて、人々の多様なニーズに応えて、人づくり機能を効果的に発揮するというのを考えた場合には、地域、県民の皆さんとの連携、協働も目指さなければいけないと思っております。従来の美術館の枠組みを飛び出して、地域と連携してその再生を図る、その拠点となる。あるいは県外との交流の拠点となる、そういったあり方。要は、県民の皆さんに支えられて活動し、県民の美術ニーズにきめ細かく対応していく、そういったあり方も追求していく必要があるだろうと思っております。

そういった目標を掲げておりますので、新しい美術館では、まずはここに今お示ししておるような鳥取県にゆかりのある美術作品を集中保管すると。そういった作品を体系的、計画的に収集して、適切かつ安全な環境のもとで作品を保存管理していく。さらには、それを保存しているだけではなくて、ジャンル別に専用の常設展示室を設けたい。現在の常設展示室はジャンル別に鑑賞していただけるような施設になっておりませんで、非常に狭うございます。したがって、現在1万点弱の美術作品を収集しておりますけれども、これを皆さんに見ていただくこととすれば、今のペースでは20年ぐらいかかります。これをもうちょっと短いスパンで皆さんに見ていただけるようにしたい。そのためには、洋画、日本画、彫刻、工芸、写真の5分野ぐらいに分けて常設展示室を設置したい。そういうふうにすれば、今まで収集してまいりました鳥取県ゆかりのすぐれた作品を皆さんにかなりの頻度で見いただくことができるようになるだろうと思っております。

また、先ほど申し上げたように、多様なもの、鳥取県ゆかりのものにこだわらない展開ということも考えていかなければいけないと思っております。したがって、ゆかりの作家の展覧会ももちろん開催いたしますけれども、鳥取ではなかなか見られないようなすぐれた作品、国内外のすぐれた作品、これを皆さんに見ていただけるような企画展も積極的に開催したいと思っておりますし、また、書いておりますように、漫画やアニメなどポップカルチャーも取り上げてまいりたいと思っております。また、館の内外にフリーゾーンあるいはオープンスペースを設けて、そこでは気軽に美術作品に接していただけるようにしたいということも考えております。

さらに、先ほど地域や県民の皆さんと連携、協働してやっていくのだということを申し上げました。ここで重要になってくるのが、教育普及活動といわれるものでございます。これについては、専用のワークショップルームを設置したいと思っております。そこで体験しながら、一緒になって学べるようなプログラムを充実してまいりたい。特に、次代の担い手であります子供さん方を対象にしたプログラム、県内の小学校、3年生がいいのか4年生がいいのか、これはいろいろ議論があると思っておりますけれども、とにかくある特定の学年の生徒さんを、年に1回ぐらいは美術館に皆さんに来ていただけるようにしたいということも考えております。さらに、館外の研究者の方とも一緒になって調査研究したり、あるいは県民の皆さんに創作発表の

場を提供したり、さらに、新しい美術館は県民の皆さんに支えていただけるような、ボランティアとしていろいろ参画していただけるようなあり方が望ましいと思っておりますので、そういったボランティアの皆さんと一緒にやっていくような、あるいは、エントランスホールやオープンスペースを活用しましたさまざまなイベントを開催したり、キッズルームを設置しますので、そこで例えば絵本の読み聞かせ会みたいなことをしてみたり、さらには、国内外から有名作家に来ていただいて、専用のスタジオで制作発表をしていただくアーティスト・イン・レジデンスといわれる活動、そうしたものに取組んでみたいと思っておりますのでございます。

そうした美術館ですので、さまざまな収蔵展示機能ですとか、先ほど申し上げたような教育普及活動を行うための機能、こういったものを充実させていかなければいけません。そのためにはそれなりの収蔵庫や展示室、これは今以上に広いものが需要ですし、ワークショップルーム等も設けなければいけません。そうした施設は今のところの想定では、延べ床面積にして1万2,000平米ほど必要になるのではないかと考えております。それぐらいの規模の施設ですと、建設工事費は70億から100億円ぐらいかかるかなと考えております。ただ、これについては、最近、県財政に対していろいろ負担がかかるのではないかと懸念も高まっております。したがって、もうちょっと少なくできないかということも今検討させていただいておりますのでございまして、これはまだ最終的なものではございませんけれども、先般は9,000平米ぐらいに圧縮できないかと。それだと60億から80億ぐらいでできるけれどもということも今考えておりますのでございます。ただ、やはり規模を圧縮しますと、機能が若干落ちてきたりということもございまして、その辺についてどう考えるか、これは最終的には県民の皆さんの御意見も踏まえながら、意識調査等をして御意見を伺った上で考えていきたいと思っておりますのでございます。

さらに、そうした美術館であれば、先ほど1万2,000平方メートルと申し上げましたけれども、これがどれぐらいの大きさかといいますと、具体的には、お隣の島根県松江市にあります島根県立美術館が大体1万2,000平米です。そこは年間20万人ほどの入館者がございます。大体同じ程度の規模の施設であれば、やはり同じ程度の方に利用してもらいたいと思っております。現在の博物館の美術分野が大体年間6万ぐらいの入場者でございまして、3.5倍ということになるわけでございます。これはかなりの数でございまして、それだけの方にきていただくためには、単に施設が大きくなったというだけではやっぱり足りないわけでありまして、企画展なんかを今以上にたくさん開催する必要があるだろうと。年間7回ぐらい開催しようではないかということも考えておまして、そうなりますといろいろ運営費もかさんでまいりますので、年間3.9億円ぐらい必要になるのではないかと考えております。これについては、現在の博物館の美術部門の運営費に比べますと、利用料を差引いたところの県費の持ち出しでございますと、1.2億円ぐらいふえる計算になります。これについても、先ほど申し上げましたようにやはり財政的な懸念もございまして、若干圧縮することも考えなければいけないのかなと考えておまして、先ほど9,000平米と申し上げましたけれども、9,000平米ぐらいだったら島根県立美術館よりも大幅に少ないので、島根県立美術館並みということをそんなに意識しなくてもいいだろうということで、例えば半分の10万人ぐらいと考えた場合には、先ほど3.9億円と申し上げていた運営費が3.2億円ぐらいで済むと。一般財源の持ち出しも、現在よりもプラス7,000万ぐらいで済むということも考えておりますのでございます。

最後に、立地場所についてでございますけれども、これについては、ここに上げておりますような3つの立地条件を検討委員会で、大体こういう場所、こういう条件を満たす場所でない新しい美術館の建設場所にはふさわしくないであろうということで、この3つの条件を設定いただきまして、市町村のほうにそうした条件に合う場所を候補地として推薦していただきました。その場所が12カ所、さらに前回の構想で候補地になっていました鳥取市の桂見を含めて、合計13カ所の候補地について専門家に検討してもらっておりまして、先般、5回目の委員会で、そのうちの4カ所がほかに比べて適しているのではないかと考えて、具体的に申

申し上げますと、鳥取市役所の跡地と、鳥取砂丘の西側と、倉吉市の市営ラグビー場、それと北栄町の旧運転免許試験場、この4カ所に絞り込まれたところでございます。これにつきましては、今後、構想検討委員会のほうに、再びその4カ所の中でどれが一番適しているのか、さらに今後検討していただこうと考えておるところでございます。

そういったことで、いろいろ検討を進めておるわけでございますけれども、基本的には今まで御説明したような方向性で美術館をつくってまいりたいと考えておるわけでございますけれども、冒頭で委員長も申し上げましたとおり、前回の美術館構想が頓挫した経緯がございます。これは何で凍結の憂き目を見たかということを考えて場合に、県民の皆さんに内容を支持していただけるような状況になっていなかったから、十分に理解していただけないままに建設に向けていろいろ準備を進めたからということがあったと思っております。そういう意味で、今回、構想委員会での基本構想がある程度取りまとまりましたら、それについて、改めてまた皆さんに、こういう方向で美術館をつくることについてどう思われますかという意識調査をしたいと思っております。それによって皆さんのほうからそういう美術館だったら進めてもいいのではないかと御判断をいただけたら、さらに進めていくという格好にしたいと思っております。

美術館ができますと、私たちの暮らしにもいろいろ影響があると思っております。ここに書いてありますように、非常にプラスの影響があると思っておりますので、我々としてはぜひ整備をしたいと思っておるわけございまして、そういう意味で、本日皆さんにこの構想の内容を理解していただきたく、こういう会を催させていただいたということでございますので、またこれから人づくりについての基調講演等をいただきますので、そういった講演、あるいはその後のパネルディスカッション等踏まえていただいて、ぜひ美術館の構想、あるいは美術館を整備することについて理解を賜りますようお願いいたしまして、私からの御説明とさせていただきます。ありがとうございました。（拍手）

○司会

続きまして、基調講演を行います。

講演をいただきますのは、世田谷美術館主任学芸員の塚田美紀様です。

御講演に先立ちまして、講師の紹介を申し上げます。塚田様は、東京大学大学院教育学研究科博士課程を単位取得退学後、2000年より世田谷美術館に勤務されていらっしゃいます。地域の学校との連携プログラムや、10代以上の参加者による美術と身体表現のワークショップ、建築空間を生かしたパフォーマンスなどを企画され、近年は展覧会も担当されていらっしゃいます。

基調講演の演題は、「美術館をめぐる人々の出会いと学び―「教育普及活動」のこれまでとこれから」です。

塚田様、どうぞよろしく願いいたします。

○塚田氏

皆さん、こんにちは。（拍手）ただいま御紹介いただきました塚田と申します。私、初めて鳥取にきょう参りまして、残念ながら日帰りで帰らなければいけないのですけれども、よく晴れてとてもいいお天気の中、少しだけ、空港からこちらまで来る車中を楽しんでまいりました。こちらの鳥取のほうで新しい美術館ができるかもしれない、つくるともつくらないともまだ決まっていないという話もありましたが、いずれにしても、つくる、つくろうという話が始まっている、そういうところに、私をお呼びいただきまして、とてもうれしく思っています。何であれ、始まりに立ち合えることはなかなかないと思うのですね。大きなものをつくる始まりに立ち会うことは、人生でそうそうないと思っております。ですので、皆さんがとてもうらやましいと、本当に心から思っております。

きょう、私のほうからは、40分間ほどかけまして、ごくごく幾つかの限られた例を皆さんに御紹介していこうと思っております。きょうは人づくりがテーマですと教えていただいております。演題は「人々の出会いと学び」と書かせていただきました。

が、「教育普及活動のこれまでとこれから」というのがサブタイトルです。

美術館もしくは博物館は社会教育施設でありますから、教育をするのが実は当然だということとは、美術館、博物館で働いている人間にとっては意外と当たり前ではあるのですが、そんなに一般の方にはぴんときていないことかもしれません。では、美術館で教育活動をする、教育普及活動をするというのは一体どういうことなのだろうかと、どういうふう考えたらいいのだろうかということがあると思います。私自身は、大きく言えば2つほどの方向性があるかなと思っております。一つは、今、既にある美術について人々に何かを教えよう、何かを学んでもらおうという活動が美術館の教育活動だという考え方。これが一つあると思います。もう一つ、それは、まだない美術、芸術について、いろんな人を巻き込んで、みんなで一緒に考えていく、形にしていく、そういう活動も実は美術館の教育活動であると思っています。そして、どちらもやっていくということが実は大事で、とりわけ始まりの段階にあるような場合は、まさにまだないものを手探りしているわけですから、そういう活動も一緒にしていくと非常に楽しいことになるのではないかなというのが私の個人的な意見ですが、それはちょっとさておきまして。

日本の多くの美術館も実は、日本の美術館でいわゆる教育活動のようなものが始まったのは大体1970年代の終わりぐらいからかなと思うのですが、そのときに何か大きなムーブメントとしておもしろいものが沸き上がっていたときというのは、実はまだない美術をみんなで作っていきこうと、そういう機運の中から生まれていると思うのですね。そして、そのころは教育を専門に学んだ人が美術館にいて何かをやっていたわけではありませんでした。同時代の美術をおもしろくしたいと思っていた芸術家もしくは美術館の職員が、何とかして一般の人を巻き込んで新しい美術をつくっていきこうとしたときに、結果的にそれが、では、美術に全く縁がなさそうな子供を巻き込もうとか、全く縁のなさそうな近隣の住民を巻き込もうという形で作品をつくったりしていったことが実は教育プログラムの大もと、根っこにはあると思っています。ですから、美術館で、博物館で何か教育プログラム、教育活動をするとなったときには、実は大もとには、今、美術はどうなっているか、今後どういう美術、芸術があったらいいだろうか、おもしろいだろうかという問いかけ、そこが教育という形をとるということではないかと思っています。

私は世田谷美術館というところにおります。1986年にできた美術館なので、ことしでちょうど30周年ですけれども、私はその後半の15年間ほど、この美術館にいるということになります。私どもの美術館の活動をざあっと、教育という視点から眺め渡してみたときには、地域密着と実験性というのがキーワードとして浮かび上がるかなと思っておりまして、この2つは今申し上げた、既にある美術を人に教えるということと、まだない美術を、まだない芸術を探るといふことの両方にまたがった形で展開しているかなと思いますので、まずは自己紹介も兼ねて、私の館の話を少しだけいたします。

こんな建物でして、公園の中にございます。世田谷区がつくった美術館なものですから、できたときから地域住民の方に何か還元するような活動をしてくださいということはもうずっと言われておりました。そこで今現在も続いている長寿企画がございます。それは近隣の方々のための生涯学習講座です。美術大学という名前の講座です。言ってみれば学校みたいなものです。定員が60名で、約半年ほど週2回通っていただいて、このような実技の講座もあれば、美術史とは何だろうということや学ぶ講義もあればという、学校のようなものがございます。これが30年間、地道に続いています。いわゆる教育活動の類いとしては、極めてクラシッくなタイプの活動かなと思います。

それから、区内の公立小・中学校との連携事業というのもございます。美術鑑賞教室といいまして、これも30年間やっております。区立小学校の4年生全員、それから中学1年生の全員が、1年に1度、美術館に来れるように、これは教育委員会のほうが決めてくださったことで、非常にありがたい計らいであったなと私たちは思っています。それで、年間に小学校4年生が約5,000人、中1が3,000人ぐらいですから、8,000人の子供たちがとにかく毎年毎年来てくれるということになっています。

美術館というものができて、一体何年ぐらいたつと形が見えてくるのかなというのは難しい問題ですが、どう考えても10年、20年。20年ぐらいかかってやっと何か形が見えるのかなというのが私の感じです。世田谷美術館の場合でいいますと、10年たったぐらいから人が育ってきたという実感があります。それは先ほど申し上げた生涯学習講座、美術大学を卒業した皆さん方が、要するに、週2回美術館に通っていらっしやっただけの日々が突然終わってしまうのが寂しいとおっしゃられて、もっと美術館にかかわり続けたいという声がもう何年も、毎年毎年寄せられていて、そうであれば、学校から来る子供たちを案内していただけないだろうかという御提案したのが当館のボランティアの始まりのきっかけでした。美術館ができてちょうど10年過ぎたぐらいで起こった動きです。

それから、やはり同じく10年ぐらいたったときに、学校から来る子供たちをただただ受け入れるだけではなくて、美術館側からも積極的に学校に出かけていってはどうだろうかという事業が始まりました。これには学生さんを巻き込んで、インターンシップで来てくれる学生さんを募って、その学生さんに子供たちが見る展覧会についての授業を考えてもらい、もちろん私も学芸員が全てそれを一緒にチェックするわけですが、授業を先に学校に出かけていくというものも始まりました。私どもの場合、インターンで来てもらう学生は、別に美術専攻に限ってはおりません。いろんな専攻の学生さんが来ます。そのこと自体がとても美術館にとっても刺激的です。そもそも考えてみましたら、世の中で美術というものを専門にしている人間などというものは1%いけばいいかなというぐらいで、大半の人は美術が専門の人生など送っていません。ですが、それでも美術、芸術を楽しみにしている人はたくさんいる。もしくは、縁のない人もいます。いずれにせよ、美術が専攻でない学生さんに、どうやったらこの展覧会をあなた自身が楽しめるかという視点で考えてもらい、なおかつそれを子供たちと共有できるようにするにはどうしたらいいかという道筋で授業をつくってもらうことをここ20年ぐらいいやっているわけです。

今、写真でお見せしていますのは、これはダンスが得意な学生さんが、とある絵の展覧会のときに、私はちょっとダンスを入れた授業をしてみたいと言い出してつくったものです。今から10年ぐらい前の写真なのですが、これをお見せして申し上げたいことは、何か見た目、新しいことをやるのが大事だと言いたいわけでは全くありませんで、自分が作品を見て感じたこと、楽しいなと思ったことを形にしたら、たまたまそれがちょっととっぴに見えるダンスという形になる場合もあるし、演劇をつくらうという授業をつくった学生さんもいますし、詩をつくらうと言った学生さんもいますし、洗濯をしようと言って、洗濯物をする授業をやった学生さんも、いろんな学生が生まれているのですが、結果的に形は問いません。とにかくそれをきっかけに子供が美術に近づけるかどうかという視点で、どんな授業もありという活動をしてまいりました。

さて、今まで御紹介したのがどちらかといえば地域密着で、既にある美術とは何だろうかということをかかわる人が学べるようなタイプの教育活動だったと言えるとしたら、もう一つ、何か実験的な要素というものをこれから少し御紹介したいと思います。

世田谷美術館は、できたときから幾つか特徴があります。それはそもそも建物自体がそうなのですが、いろんなジャンルに開かれていよう、そんな場でありたいということで、例えば館内、展示室だけではなくて、エントランスのロビーであったり、もしくは野外のちょっと大きな木のある広場があったりするのですが、そういったところでコンサートはもちろんのこと、ダンスとか演劇とかそういったパフォーマンスもできるようにというイメージネーションでできている建物なのです。そして、展覧会自体もちょっと毛色の変ったものをするのが多く、それにあわせてさまざまな関連企画と称して、音楽、ダンス、演劇などなどをずっとやってきた、そういうDNAのある美術館でございます。要するに、見に来る人の体そのものに訴えるというアプローチをとるとのことです。

教育活動のほうでも、ちょっと実験的なものですが、展示室の作品を見て、講師の方には演出家の人とかダンサーの人をお迎えして、何か体を動かしながら自分の新しい表現をつくらうということ、これも何だかんだで30年近くいろんな形をとりながらやってきていま

す。最初は、元気に演劇という名前で、文字どおり演劇をつくる活動をずっとやっておりました。その後は、誰もいない美術館でという、ちょっと風変わりな名前ですけれども、これは主に中学生、高校生の子たちに来てもらえたらと思ってやっていたプログラムですが、展示室の作品から、演劇なりダンスなり詩なり、そういったものをつくって、閉館後、誰もいない美術館を占領してそこで発表しようという、そういうワークショップです。そして、しばらく前からは、もう一度シンプルに演劇という言葉を使うようにしまして、演出家の方と私と2人で組んで、10代以上の方を対象に、いろんな年齢の方が来れるようなワークショップをやったりなどしております。

それから、これが先ほど申し上げた、建物自体がそもそもそういうパフォーマンスができるようにという願いを込めてつくられているのだから、それを生かそうというシリーズもやっております。エントランスを使うので、トランス／エントランスという駄じゃれみたいな名前のシリーズを、もうこれも11年目ですか、やっています。

世田谷区内には劇場もありまして、ですから、劇場がないからこういうことをやっているというわけでもないのです。ただ、美術館は、どんなにパフォーマンスができるようにとやってつくられた空間であっても、劇場とは違うので、ここで何かを上演しようとする、それは物すごく大きなチャレンジを演じてくださる方々に課すことになります。ですので、このシリーズをやり始めて気づいたことは、ただ単に劇場でやったものをここでやりたいという人たちにはここは向かないと。新しいこと、新しい演劇、新しいダンスをつくりたい人、しかも、それもちょっと変わった空間そのものと対話しながら作品をつくりたいアーティストにここは向いているということに気づいて、そういう人たちを選んで、1年に一遍、作品をつくってもらっていることをやっております。

ほんの一つの美術館の例だけの御紹介にはなってしまいましたけれども、私が申し上げたかったのは、世田谷美術館、区立の小さな、小さないいましても、世田谷区は人口が89万人もおりますので、人口規模からすると、美術館が1個あってもそもそもおかしくはない区ではありますが、ただ、行政単位としては区にすぎませんし、割とのんびりした場所にあるということもあり、地域密着が一番大事で、しかし、実験的であることを忘れないで、美術を常に新しくおもしろく更新していく活動の拠点となっていくにはどうしたらいいかを考え続けた30年であったと。そういう例として御紹介させていただきました。

ここからは、また少し別の話です。日本の美術館も、70年代の終わり以来さまざまところが、それぞれの土地に合った、場所に合ったおもしろいプログラム、展覧会も含め、いわゆるワークショップといった教育活動も含め、いろいろおもしろいことを展開してきています。ですが、一步、日本という国の外に出て、比較できるような、比較をしながら、別の国の、別の美術館の、別のプログラムのあり方などを見ると、またいろいろな発見があるものです。私はたまたまいろんな御縁があって、定期的にイギリスのミュージアム、美術館、博物館を視察する機会に割と恵まれてきた関係もありまして、きょうはイギリスのお話を、後半少ししたいと思っています。

拡張する教育プログラムというタイトルをつけたわけですが、今、私がお話しした私の美術館の教育プログラムも、それなりに広がりはあるほうなのかなとは思いますが、イギリスに足を運びますと、これはお国柄、それから国の文化政策の影響とか、さまざまなことが影響して、より社会に対して明らかな形で美術館や博物館が開かれて、つながっているべきであるという考えが非常に強いものですから、そういうのを見ると、さまざま、ああ、こういう方向性もあるのかということがわかるという意味でおもしろいのです。

まず最初にロンドン、イギリスは今ちょうどEUから出るのだという投票の結果が出て、大揺れに揺れているわけですが、ロンドンにテート・ブリテン、テート・モダンと呼ばれる大きな国の美術館がございます。そのプログラムを事細かに御紹介するつもりはございませんで、実はこの美術館のホームページを見てわかることを、皆さんにまず御紹介しようと思っています。ホームページの作りから、一体イギリスという国がどういうふうな美術館や博物館と社会をつなげようとしているかを考えているか、それがよくわかるからです。

まず、そのウェブサイトをぱっと開いてみますと、どんな美術館でも博物館でもいろいろな項目が最初のページに載っていますよね。テートという美術館の場合は、大体こんなふうになっています。まず、コレクションを紹介するボタンがあり、それから、今やっている企画展、今やっているプログラム、イベントのボタンがあり、それから教育プログラムに当たるラーン、学びになりますか、そういうボタンがありまして、最後に出版物に関するボタンがある、シンプルなつくりです。ただ、これはちょっと前のものなので、今はひよっとしたら全面リニューアルして違うことになっているかもしれませんが、こんな感じです。今やっている企画展のページというのが、やはりある意味当然ですが、一番よく目立つ。これはマティスという画家の晩年の作品を集めた企画展の年のとあるページのメインビジュアルだったわけです。

では、教育のほうは何かかなと思ってページをクリックしますと、こんな写真が出てきまして、お姉さんが男の子たちに対して何か説明をしている写真が出てきます。これは学校だなということはずぐにわかります。教育といえば、やはり何だかんだいって学校向けのプログラムというイメージがイギリスでもあるのだなということがよくわかります。ちなみに、非常に興味深いのは、この写真のお隣に学習プログラムに御寄附を下さいという表示がありまして、そこをクリックするとどんだん寄附のページに行くことができるようになっておりまして、これはイギリスという国が、あるときから文化を振興するに当たって、公的なお金だけではもう足りない、やっていけないので、民間のお金を自力で取ってきなさいという動きが出て、ホームページにまでこういうものが出るようになったという事情があるからです。

その教育のページをさらに開いていきますと、これもさまざまな対象別の項目が出てきます。国を代表する大きな美術館ですから、これぐらい細かく対象別にプログラムがあること自体は、まあまあそんなものかなと思えるわけですね。教師向け、乳幼児連れの方向け、若者向け、大人向け、地域向け、最後は遠隔地で来れない皆さんのためのオンライン資料。うん、なるほどなるほど、まあこんなものだろうということがわかる。この先がおもしろいのです。教師向けというページを開きますと、こちらの左上の写真が出てきます。これを見ますと、先生はブラックの方だなという感じがいたします。子供たちにはやはりブラックの子、もしくはスカーフをかぶったイスラム系の子、いろんな肌の子がいることがこの写真を見ると一目瞭然であるということがよくわかります。そして、地域というボタンをクリックしますと、この右下の写真が出てきます。お年を召した方が作品を見ている写真ですけども、これを見てわかることは、先生に対してアプローチするという場合、イギリスにおいては、それはもう多文化な出自の子供たちを日々相手にしている教員のことであり、地域といった場合、それは高齢者がたくさんいる近隣のことを指すのだな、そういうイメージを持っていることがホームページを見るだけでわかるわけです。

ほかにも乳幼児向けのプログラムなんかを見ますと、これは、お子さんを育てている方々は、これは日本でも同じですけども、非常に孤立傾向にある。しかも、そもそも移民が多い社会であったりすると言葉の問題もあって、ますます母子が非常に隔離された状態になってしまう。それに対するケア、それに対する対策としてプログラムがあるということも何となく見えてきますし、若者向けのプログラムは何かといいますと、これは職につけなくてやはり孤立している人たち、若い子たちを何とか勇気づけて、生きていこう、ちゃんとやっていこうと思えるようなプログラムをアートを通してやっていくというものであることがわかりますし、そして地域といえば、それはやはり先ほどの写真でお見せしたとおり、高齢で孤立してしまいがちの方々に対して何とか美術館がプログラムを提供するということを意味する。昨今の、特にロンドンあたりでは、移民でなおかつ高齢化している方々が非常に多くて、何重にもバリアがあるような状況が生まれていると聞きますから、それに対してミュージアムという場所が何かできないかということが大きな課題になっている。少なくともそのような態度をとるのが当然であるということがお国柄であるということです。

今のお話をざっとまとめてみますと、要は社会的に阻害されやすい人たちが物すごく多いと。一般の大人などという概念が実は物すごく小さい、実態としてはそんな人はいるのかどうかというぐらいかもしれません。むしろいろんな意味で阻害されやすい人たちがたくさんいる社会

なのだから、そして、それは経済的にももちろん困難に陥りやすい人々のことであるから、その方々に対して社会に開かれた施設として何ができるのかという発想が、イギリスの場合はどうも非常に強いということがわかるわけです。そうなってきますと、一般に私たちが教育プログラムと言うときの教育という言葉でイメージする対象よりも、これはぐっと福祉のほうのイメージに実はもう近づいているのではないかということ、私などはこの間、2年前に行ったときにすごく実感したわけです。

先ほど、こちら鳥取県の人口が、今51万人でしたか、58万人であると伺ったのですが、今からお話するイギリスのマンチェスターという都市はもっと少ない、人口53万人ぐらいの都市ですが、ここで一体、美術館や博物館がどういうことをして地域とつながろうとしているかというお話を最後にしたいと思います。

私も2年前に行って初めて知ったのですが、このマンチェスターという都市、サッカーチームで非常に有名ですが、高齢者に優しい都市ということで、今、世界的に知られつつあるそうです。そして、健康プラス文化ということ 키워ドに、市内の複数の文化施設の共同プロジェクトを進めているということで私も視察をさせていただいた、そんなところです。

高齢の方が多いというのは世界中どこもそうなのですが、このマンチェスターという都市も非常に深刻であると。どうしたらいいかということで、お年寄りのパワーを逆に引き出すという発想がまずあるということで、こんなことをやっていますよというお話を聞きました。それは、カルチャーチャンピオン、チャンピオンというのは王者のチャンピオンという意味もありますが、何というのでしょうかね、文化大使みたいな、そういう意味もあるようで、要するに、御高齢の文化大使みたいな方々を集団としてつくるという取り組みを市がやっています。その方々に、要するにいろんな文化施設でこんなことをやっているから来てみませんかという御案内状を送る。そして、元気のある方はどれどれと言ってそこに行ってみると。そこがおもしろければ、それをお隣さんに話したりして今度一緒に行こうみたいな、そういう非常に地味といえば地味な活動をやっているということなのです。それが高じて、御高齢の方々自身による文化イベントも博物館でやるようになり、要するに、カルチャーチャンピオンの方々が提案をするわけです、こんなことをやったらどうかと。できるものもできないものもあるわけですが、一緒にできそうなものを美術館、博物館がやっていくということが進んでいる。ここがおもしろいところですが、市としての取り組みですから、市役所に高齢者理事会という縦割りの部署を横断する、そういう理事会が実はできていて、そこにロコミ高齢者集団の方々も参加しながら、実際にも市の行政に少しかかわる形で動いているという話を聞いてまいりました。

こちらは、今お話ししたカルチャーチャンピオンの活動とはまた違う活動を今から御紹介しますが、マンチェスター大学に附属している博物館を訪ねました。入り口を入りますと、自然史系の博物館ですからサンゴの展示をやっていたのですが、そのサンゴというテーマに合わせて、地域ワークショップの、何かちょっとすてきなワークショップでつくったなどおぼしき成果物が展示してありました。左のほうは、いろいろな毛糸をちょこちょこっと編んだものをウニとか海藻とかサンゴに見立てて、編み物アーティストと一緒に一般の方がつくったものであるらしいということがわかりました。あとは、タペストリーみたいなものも壁にかかっていたりすると。はあはあ、なるほどなど、うん、地域の方々に開かれた活動をしているなどということはおかったのですが、よくよくこの看板を読んでみると、これは実は脳卒中患者の方と編み物アーティストのワークショップの結果、生まれた作品だったということがおかったのです。要するに、ただただ地域の人という漠然としたことではなくて、医療機関と組んでそういうことを博物館がやっているということがエントランスに入ってすぐわかるようになっていた。それから、認知症の方が非常に多いのも、日本もそうですがイギリスでも非常に問題になっていますが、そういう方と家族のためのプログラムということで、これはすごい写真ですね、ニシキヘビをさわろうという、そういう写真ですが、そのような機会を設けて、何というのでしょうかね、認知症の方の心身の活性化に寄与するようなプログラムなどもやっていたりする。プログラムの名前がコーヒー、ケーキ・アンド・カルチャーという、要するに茶飲み文化みたいな、お茶を飲みながら文化みたいな感じですかね。そういう気軽な名前がついていて、ふだん

家に閉じこもりがちで認知症の方とその家族の方を外に出すための試みであるということがわかります。

それから、これも大学附属の美術館の事例ですけれども、乳児と親向けのプログラム、カルチャーベイビーズというものをやっているという話を聞きました。展示室の中に乳児とお母さん、お父さんがわあっと入って、楽しげに過ごしている写真ですけれども、これもよくよくお話を聞きますと、乳児と家族の保健衛生という観点で、これは何だったかな、どこだったかな、製薬会社だったかな、が助成金を出しているという、そういうプログラム、その助成金でつくったプログラムだったのです。これはどういうことかといいますと、先ほど申し上げましたように、小さなお子さんを持っている御家庭、とりわけ言葉が不自由だったりする移民の方が多い地域の家庭は、子供と親だけで引きこもってしまうことがすごく多い。それが親と子の両サイドにとっての心身の状態に非常によく影響を与えると。それを改善するという名目で、文化に対する助成金を製薬会社か何かが出して、それに美術館が応募したという、そういうことだということがわかったわけです。つまり、何となくふんわりと、赤ちゃんのときから美術の教育は必要だよなという、そういうことではなくて、非常に明確なケアとしてそういうプログラムをつくっているということがわかったわけです。

そういった事例をイギリスに行ってみて見聞きしてきまして、日本でもぼつぼつとこういうことは始まってはいるので、イギリスがすごく新しいとかすごく進んでいるというつもりはないのです。ただ、やり方が非常に、何と言ったらいいのでしょうか、徹底していると。やると言ったらやるのだという断固とした感じが非常に新鮮に私の目には映ったのですが、いずれにせよ、美術館なら美術館という場所が、医療とか福祉とかそういったルートでもって地域の問題にかかわろうとしてプログラムをつくっているということは、今どんどん進んでいることがよくわかりました。

どんな文化施設でも、文化以外の機関とパートナーシップ、連携を組みながらやっていくべき時代であるということ自体は、多分もう変わらないと思います。芸術のジャンルの中だけで越境するだけではなくて、芸術外のジャンルに越境していくことも美術館にとっては、これは美術にとっても新しい活路になる、パワーになる試みであろうとは思いますが。ただ、そうやってどんどん外に出ていくときに、やはり譲れない一線というものを出ていく側が持っていないと、何かぐずぐずになってしまうというおそれも実はあるわけです。私はイギリスの事例を見ながら、それを非常に心配したわけです、大丈夫なのだろうか。美術館が医療のためのものになったり、福祉のためだけのものになってしまうりする、そういう危険を美術館にかかわっている人々は考えないのだろうか。

そうしましたら、ヘルス・プラス・カルチャー、健康プラス文化という取り組みを推進しているマンチェスター市が出しているこのパンフレットを読みましたら、ちゃんとそこは押さえているということがわかりましたので、最後そこでお話を締めたいと思います。

こんな文章があります。博物館や美術館はマンチェスターの人々の健康に役立っていますが、そこで決定的に大切な点は何でしょうか。人々の健康に役立っているともう断言している時点ですごいのですが、役立っていますと。大切な点は何かと。展示物を見て気分がよくなるような体験を提供しているという単純なことではありません。いいな、美術、心、洗われるな、癒やされるなレベルではありませんとはっきり言っています。例えば美術館で不愉快になるような作品に出くわしたり、歴史博物館でつらい時代の記憶にかかわる展示に遭遇することがあるでしょう。そうすると、それに遭遇した人には複雑な感情が当然湧き上がってきます。ここが重要です、でも、各施設には専門スタッフがいます。彼らのサポートがあれば、人はそうした複雑な感情に向き合って、より高い幸福の感覚へと自分を導くことができるのです。こういう一種の宣言のようなものがさりげなく市のパンフレットに書いてある。

私はこれを読んでなるほどなと思ったわけです。地域社会にどんどん出ていく、社会にどんどんつながっていく美術館というものをイメージするとき、そういう構想をするときに、結局大事になってくるのは、きちっとした人を同時に育てることだということがここには書かれているわけです。それは美術なら美術のことをきちっとわかっている、歴史的な知識があるとか

そういうことだけではなくて、今後の美術がどうなっていったらいいだろうということを考えられるような専門スタッフのことだろうと私はこれを解釈しましたが、そういうスタッフを育てる。そして、必ずしもその人たちは館の職員でなくてもいいわけです。ボランティアでもいい、いろんな形で美術館にかかわる人が、そういう美術の専門性というものがきちりあって、それを理解することがまず根本として重要だということをおわかってくれるような人をたくさん育てることがこれからはますます大事になっていくと。そういうメッセージをもらったなと思って、私は、2年前のマンチェスターですが、マンチェスターを去ったと、そういうことがございました。

そもそも博物館という場所に人が来たときに、何かを学ぶといったときに、それは学校での学びとはちょっと違う性質があります。学校という場所は、人生の中であるごくごく限られた時間で何かを覚えたり理解したりすることになるわけですが、博物館という場所は、もううんと年をとってからも行きますし、もちろん若いときにも行きますが、そこでの学びは一体何かなど考えたときに、それは自分の人生である瞬間は何だったっけということをお再解釈、改めて解釈するためにといいますか、そのきっかけになるようなことを発見するような場所だということが美術館、博物館の特質なのではないかと思うわけです。そうであるからこそ、一瞬、えっ、何だろう、わからないとか嫌だなと思うようなことに仮に会ったとしても、時間をかけて、あれは何だったのかと、それは自分の人生に果たして関係があるのかということをお自問できるような場所というのが美術館、博物館のよさだと思うわけです。ですので、ちょっと一歩外に、外国に出て見られない事例を見ても、結局は美術館や博物館で学ぶとは何だろうなということに返ってくる。そういうことを教えてくれる、私のイギリスでの体験はそういうものでありまして、自分の館に戻って、あれは何だったのかと、今、自分の美術館の展示室で作品を見ている人は何を反すうしているのかなということをお改めて考えるきっかけにもなりました。そして、私のきょうの拙いお話を聞いた皆さんがそういう視点で、これからの美術館、博物館のことを少しでも考えていただければ、私はうれしいなと思っております。

ということで、私のお話はこれで終わらせていただきます。ありがとうございました。（拍手）

○司会

ありがとうございました。

教育プログラムを広い意味で捉えたときに、地域に開かれた美術館の可能性というものがたくさんあるのだということをお話を聞きながら思い、心を動かされました。

塚田様は、この後、パネルディスカッションのほうでもパネリストとして参加してくださいませ。

しばらくそのための準備をいたしますので、少しお待ちくださいませ。

〔休憩〕

○司会

それでは、パネルディスカッションを開始します。

まず、壇上の皆様をお紹介いたします。

コーディネーターとして、演出家であり、鳥の劇場芸術監督、また鳥取県教育委員長でいらっしゃいます中島諒人様。

○中島教育委員長

よろしく申し上げます。（拍手）

○司会

パネリストとして、先ほど基調講演をいただきました塚田美紀様。（拍手）

そして、鳥取県美術館整備基本構想委員会委員の水沢勉様。（拍手）

同じく、田村閑美様。（拍手）

同じく、来間直樹様をお願いしております。（拍手）

それでは、コーディネーターの中島様、どうぞよろしくお願ひいたします。

○中島教育委員長

では、始めさせていただきます。今が2時15分で、30分ぐらいお話をして、それで、後はこちらの会場の皆さんと少しやりとりをするということになるかと思ひますので、すごく短い時間で大変恐縮ですが、よろしくお願ひいたします。

塚田さんのお話、私も大変おもしろいなと思ひてお聞きしました。私も世田谷美術館とかよく行きましたし、それから、イギリスはやっぱり演劇なんかの分野でも教育とアートをどうつなぐかということに関して非常に積極的で、私も演劇の事例は割合知っていたのですが、非常に新鮮にお聞きすることができました。ありがとうございます。

それで、まず、来間さんと田村さんに、今、塚田さんのお話を聞きながら、水沢さんは美術が御専門でいらっしゃるのだからたくさん知識をお持ちかなと思ひるので、まずお二人にお聞きしたいのですが、いわゆる美術館の仕事といったときに、世田谷美術館にせよイギリスの事例にしても、やっぱりここまでやるのだなとか、こういうこともやるのだなという驚きというか、新鮮な感じがあったのではないかなと思ひますが、お二人、どのようなことをお感じになりましたでしょうか。どちらからでも。

○田村氏

失礼します。すごく楽しみにしていたお話なので、とても感動しました。この検討委員になってから、いろいろ勉強をさせていただきました。最初は本当に、美術館というものは、ちょっときれいな服を着て、心構えをきちんと持って行くものだと思ひていましたが、それが徐々に、ふだん着でも行けるところがいいなあ、買い物帰りに行けるところがいいなあと思ひつつ、そしてまた、きょうお話を伺ったら、福祉とか健康と文化ということは、本当にそうだよなとすごく実感しました。この検討委員会の中でも、子供たちのためにということはもちろんしっかり取り入れていただきたいという話はしてきましたが、そういう中で、私の中で最近、子供はもちろんです、高齢者は絶対必要だよな、高齢者にとって心地いい場所が絶対必要だよなと最近思ってきたところなので、とても勉強になりましたし、ぜひ鳥取県の美術館はそういういったものであってほしいと思ひました。

○中島教育委員長

ありがとうございます。

では、来間さん、お願ひできますか。

○来間氏

教育普及というのが一つの美術館の柱というのは検討委員会の中でも説明があつて、いろんな美術館を視察したところでも、かなりどこでも力を入れているというところで、それは、ぱっと考えると、やはりこれからの人材で子供を中心にするということが大体この事例でもあつて、ちょっと田村さんと重複しますが、教育というよりも、イギリスの事例はむしろもう福祉に近いと、それは驚きが大変ありまして、鳥取県もすごく高齢化して、高齢者が多くなる、これからもどんどんふえていく時代に、人生のよりどころとして例えば仕事とか家族があつて、そういったものから離れたところで人間がよりどころとしていくものの一つとして美術とか音楽がとても大事だということは何となくぼんやり頭の中にあつたときに、ああ、こういう美術館があるというのはとても新鮮で、驚きを覚えました。

○中島教育委員長

ありがとうございます。

水沢さんにもお聞きしたいのですが、神奈川県立近代美術館の館長としていろんな事例を御存じであり、いろんな実践もされているかと思いますが、世田谷美術館の例もさることながら、やはりイギリスの取り組みで、もう医療とか福祉というふうに明らかに他分野との連携を打ち出しているということは、これは割と世界的に、イギリスだけではなくていろんなところで起こっている現象なのでしょうか。

○水沢氏

イギリスはすごくその点の意識が高いところです。やっぱり移民が非常に多いというところですね。多文化共生をしないと、もう社会そのものが成立しない。そういうときの結節点として美術館、文化施設はある、教育機関もある、そういう意識はすごく早く目覚めていて、そういうのがああいうパンフレットの中になんか強いしかりとした主張として、文字として表現される。そういう文化的背景がすごくあるなというのをやはり塚田さんのお話からも感じました。

○中島教育委員長

なるほど。

改めて塚田さんにもお聞きしたいのですが、私たち、社会教育というと、どうしても教育という言葉にまつわるイメージだと思いますが、やっぱり教えられるという感覚が強いですよね。それで、さっき初めのほうの塚田さんのお話でも、まずは知るという部分もとても大事だというお話があって、例えば誰それが、例えば僕のイメージだと、誰それが何年ぐらいにこんな作品を描いたということを社会科の教科書で覚えさせられることの延長として、美術館でも何かメモしながら聞かなければいけないのみたいな話を聞かされるのかなど、社会教育というと我々思いがちなところがあるではないですか。確かに、知らなければ人間わからないこともあるから、一方で、知って豊かになるということもあって、知るということもすごく大事だなとも思うのですが、いわば教えられるという受動態で語る言葉ではなくて、実際さっきのテートでしたか、あそこでもラーンということになっていましたよね。学ぶという能動の言葉になっていたと思うのですが、この辺の根本的な考え方、私たちが美術館での教育といったときに思うイメージと、いい悪いではないのですが、例えば御紹介いただいた事例との違いというのが、私は根本的な部分の少し違いがあるような気がしたのですが、いかがでしょうか。

○塚田氏

そうですね、おっしゃるとおりだと思います。イギリスの場合も、教育、エデュケーションと言葉を長らく使っていたのが、恐らくこの20年ぐらいだと思いますが、徐々に学びという、ラーンという言葉を意識的に使い始めているということは一つ言えると思います。そして、日本の美術館でも似たような動きがちょこちょこ今起こっているかなという気もいたします。教育という言葉は、私は必ずしも悪い言葉だとは思いませんが、いかんせんイメージがよくないのですね、悲しいことに。それは、教え込まれるという上から目線のイメージがつきまわってしまっている言葉であるということと、学校教育の教育というイメージが強過ぎるのだと思います。ですけれども、学校という場でなく、何かの目的のために何かを覚えなければならないという、そういう文脈を外れたときに、それでも人が何かを知りたいと思うことはとまらないとしたら、どうして私たちには好奇心というものがあるのかなということを考えたら、それは、つまりそれが学ぶということなわけですが、何で私はこんなに学び欲が尽きないのかと思う人も多分いると思います、学校を出た後で何か知りたいと思う自分に気づいたときに。美術館、博物館はそういうふうに視点を転換することで、人がどうして学びたいと思っているのかと視点を転換することで、自分たちが持っている資産、作品であったり、さまざまなものであったりというものを全然違うふうに提供することができる。そういうことに少なくともイギリスの博物館の関係者は気づき始めているし、日本の中でもそういう視点の転換を意識している人たちが少しずつ出てきていると思います。

○中島教育委員長

なるほど、なるほど。

初めに田村さんも少しおっしゃっていたのですが、美術館というどうしてもちょっと、別にきれいな格好をして行くこと自体はいいと思いますが、別にきれいな格好で行かなければいけないというものでも、げたは困るけれどもということはあるかもしれませんが、要するに、どうしても私たちは美術館というものを考えたときに、経済の達成によって得られた富によって社会に与えられる御褒美のようなもの、何かしらおまけのようなものとして文化施設というのを捉えるようなことが、傾向があるのではないかと思います。いわば、あってもなくてもどっちでもいいけれども、我々もいいかげん金持ちになったのだから持とうよみたいな感じで思うものという傾向があるのではないかなと思うのですが、今の事例を聞いていると、少しそういう位置づけから違って、より人生を支えるために不可欠なものという形で美術館を位置づけようということが意識され、実践としてさまざまなものがあるなということを感じました。

それで、今イギリスの事例があったのですが、私、大事なことは、それぞれの社会において、さっき水沢さんも、イギリスにおいては移民という問題があり、多文化共生という問題があるのであいうアプローチになっているのだということがあったと思います。何を社会的課題とするのかということとは当然日本とイギリスでは違うし、世田谷と鳥取も違うし、鳥取と神奈川も違うということだと思ってしまうのですが、そういう意味で、改めてまた水沢さんにお聞きしたいのですが、今私たちのコミュニティーの中で、あるいは神奈川のコミュニティーでということでもいいですけども、どういう課題が、美術館が取り組むべきものとして日本の中では意識されているということがあるでしょうか。

○水沢氏

イギリスとの関係でいうと、やっぱりイギリスと日本はかなり違うと思います。前提が違うので、向こうがいい悪いの話ではない。特に日本の近代、現代美術館というのは、20世紀半ばまでは一つもなかった、基本的に。私立のコレクションの展示はあったけれども。でも、それはある一つの個人コレクションが公開されているという性格だと。それをもう少し公的な、みんなの税金で支え合ってコミュニティーの中にそういうものを生み出すということは、ようやく戦後できたことです。それはなぜできたかということ、日本が敗戦したからですよ、戦争に負けた。戦争に負けた国がどうやって文化的にもう一回立ち上がるのかということに、美術館が絶対要するという認識がまずあったと思います。イギリスはそういうことがないので、基本的に近代美術館というふうにモダンとついている、テート・モダンもモダンをつけましたが、あとオックスフォードの附属美術館は近代美術館という言い方になっているぐらいで、余りモダンと殊さらつけません。というのは、もう啓蒙主義の時代からずっとモダンのことを試みてきた蓄積があると思っっているのです。大英博物館も、そういう意味で世界で一番早い博物館の一つである。そういう流れの中であって、非常に熟成してきて今のような形のプログラムって広がっていく、地方都市も含めて、ということはあると思います。

日本の場合は、やはり20世紀半ばまでは近代美術というものは社会の中に根づいていなかったということがまずすごく大きいですね。それはやっぱり近代美術館をつくらなければいけないということは20世紀後半のすごく大きなテーマだった。それで各県がずっとつくって、この半世紀以上の時間がある、各県がそれぞれに、名称は近代とつけたりつけなかったりするけれども、気持ちとしては、美術館と言う以上博物館ではなくて、近代や現代の美術を並べる場所だという思いでつくってきたわけです。その出発点には、やっぱり戦前の経験を繰り返したくないということがあったわけです。ということは、エンライトメントというか、啓蒙しなければいけない。近代的な私たちであるためにはどうあらねばいけないか、やっぱり教育だったのです。エンライトですから啓蒙です。暗い人を明るくしてあげなければいけない。そこへ明かりをともしあげなければいけないというのが近代美術館だったのです。それをもう半世紀以上経験してきたので、そういうことのある程度ミッションは終わりつつあると思

ます。ということは、結果気がつくのと、物すごい短期間だけれども、イギリスと同じような状況へと僕らも来たと。実は非常に外国人は多いし、工場で働いている人たちは日本人よりも多くなっているような工場も、実は関東周辺では非常に多い。そういう社会になっているのに、意外にみんな気づかない。あるいは美術館に行ってそういう人たちに出会うプログラムがあるかということ、意外にない。そういうものをつくって行って、美術館が開かれないとだめだという認識を持つようになった。これはどちらかというと学ぶということに近くなってきたわけですね、教えるではなくて。お互いに学んで、隣村に何か外国の人たちが住んでいるけれども出会う場所がない。意外に美術館でやるワークショップで出会えるという可能性が出てきたのですね。だから、やっぱり成熟するためにそういうものが今すごく必要になってきているという意識が生まれたと思います。

でも、すごく皮肉なことですけれども、恐らく第2次大戦敗戦後はみんな生きることが精いっぱいだったので、死なずに生きているのだから、生きていることはもう大前提だったのですね。だから、学びたいと思っていた、教えたいと思っていたのですね。でも、今これだけ衣食住が足りて、もちろんいろんな災害が起きたりいろんなことはあるけれども、生きることは割と満たされているのに目的を失ったというのが、やっぱり末期というか、成熟した資本主義社会の一つの限界です。一方で空洞化がすごく起きる。そういうことが起きていの中で、僕らが生きている価値の目的を見つけたい。そういう場所にアート、文化がある。イギリスはそういうもともと老成した文化だから、そのプログラムをいろいろ持っていたわけですね。19世紀に大きな小説が生まれたりしたのもそうだし、16世紀に既に演劇があれだけ発達したのもそういうことだと思います。そういう積み重ねの中で今の博物館、美術館がある。日本も日本という特殊な文化圏ではあるけれども、短い時間の中で今その成熟の、ある臨界点みたいなものをたどりつつあるのは確か。ということは、もっとどう生きることがいいのかということを知りたいと、この空虚な生きている感じは嫌だ、それを本当に目覚めさせてくれるのは文化や芸術だと思う人が潜在的に多くなっていると思う。そのために美術館や博物館も既存のあり方から何かを変えなければいけないと今思い始めていると。そういう点では、僕は、イギリスとある意味変わらない。世田谷も一挙にそこまで来ているのではないかと。塚田さんもそれを押ししてきたのではないかと思います。

○中島教育委員長

なるほど。ありがとうございます。

水沢さんも検討委員会に入っていると思いますが、田村さん、来間さん、それぞれのお立場の中で、さっき田村さんは高齢者のお話がありましたけれども、お二人が考えていらっしゃる、今、美術館がこの鳥取県というローカルなコミュニティの中でどういう社会的な課題に向き合っていくといいのかということ、必ずしも具体的なことでなくても構いませんけれども、お聞かせいただけたらと思うのですが。

では、今度、来間さんからお聞きしてもいいですか。

○来間氏

鳥取県の人口が58万人を切ったという話もありますけれども、人口、イコール、力ではないけれども、力とも言えるというか、やっぱり寂しいですよ、人が少なくなっていくのは。特に、高校を卒業して大学に行く、就職するといった、そういう生きのいい人たちがどんどんどんどん東京や大阪に出て行って、これこそはもう何十年も前から同じことが繰り返されていますが、それがどんどん繰り返されて行って、僕も10年ほど前に東京からこっちにUターンしてきましたが、たまにそういうUターンをする人もいるけれども、帰れない人もたくさんいて、やっぱり地方はそこが一番の問題だと思っていまして、当たり前前のことですが、本当に寂しいですよ、すごく。

○中島教育委員長

わかります。

○来間氏

やっぱりそういった場所での心のよりどころではないけれども、としての美術館というか、そういった場所というのは、地域にいる人もそうだし、それから、外から鳥取県を眺める人にとっても、そういった拠点というのは、僕はやっぱりとても大事で、今までなかったことで、失ったものも僕はあるのではないかと考えていまして、県立美術館としては一番最後になりますけれども、やっぱりこれをきちっとつくっていくことは大事ではないかなと思っています。

○中島教育委員長

やっぱり多くの人の心のよりどころになるものであり、出ていった人が、若い人ばかりではないけれども、あそこに帰りたいなと思えるような、灯台のような場所になったらいいなと。

○来間氏

そうです。

○中島教育委員長

田村さん、いかがでしょうか。

○田村氏

私も日々日々、自分が思い描く美術館というものが心の中でどんどん高度なものになっていっているように自分では感じていますが、まず最初に本当に思ったのは、私たちの子供、孫などが鳥取県にいる、鳥取県で生まれたから、鳥取には美術館がないから、県外に行ってみないといけないのだよということもあってのほかだと。そんな格差のあるような地域であっては、まずだめではないかとすごく感じていました。ですから、ぜひ欲しいなと思っていますが、そのあり方という部分が、今の先生たちのお話も聞いて、鳥取県は本当に一番後発な美術館になるかと思うので、今までのように与えてもらうだけの美術館ではなくて、私たちが利用できる、どんどん利用して使って使って、自分の身になって心を支える、よりどころになるようなものにもこれはなるものなのだなと今改めて、また欲が出てというか、お話を聞いてプラスな部分を見つけたので、本当にそういったものがひっくり返って、心プラス文化であったり、教育であったり、生活の中の本当に大事な部分がつくれるのではないかなというか、ぜひつくりたいと思っています。

○中島教育委員長

田村さんと、先ほどお昼御飯を食べながらお話を伺っていたときに、最近、美術を見てすごく心が動かされることがあるという話をお聞きしました。その中身をもう少し詳しくお聞かせただけならと思うのですが。というのは、私、一般論、総論として、美術は心の糧になる、芸術はという話は出てくるけれども、でも、そここのところ、その体験というのは個々人のユニークなものですよね。一つ一つの、それぞれの人生の体験、タイミングにおいて、このことがぐっと自分の胸に深く刺さったという一つ一つのユニークさということがやはり大事な価値だと思うのですが、何か個人的なあれで恐縮ですが、ちょっと田村さんが最近お感じになったことをお聞かせいただいてもいいですか。

○田村氏

そうですね、やっぱり人間というのは、心、精神的なもので、同じ作品を見ても、年であったり自分の背景であったりすることで全然違って見えると思います。それを見ることによって自分の元気が出たり悲しくなったりいろいろありますけれども、それは人間だからこそ持つすごく御褒美のようなものだと私は思っています。ですから、自分の心を最大限に素直に作品の

前で広げられるし、そこで得るものもたくさんあると思っているので、人間ならではの本当に御褒美ではないかなと思うのですけれども。それが年をとればとるほど、きつともっともっと味わい深くこの鳥取で見られる部分が、近場で見られることがすごくありがたいことになっていくのではないかなと思います。

○中島教育委員長

やっぱり、例えば昔見た同じものを見ても、久しぶりに見ると感じ方が違うということがありますよね。

○田村氏

全然違いますね。もう涙が出たりとかね。

○中島教育委員長

そうですね。

先ほどの塚田さんのお話の中で、自分の人生を捉え直すという話があって、内省ということですよ。やはりどうしても私たちは日々の日常があって、お金を稼いで、家族とごちゃごちゃあってということで、どうしても忙しさにという部分があるけれども、しかし、ふとした瞬間に自分の人生の意味といいますか、そういうことを立ちどまって、自分なりに言葉を与えてみてということが必要なことはすごく多いのではないかと思います。それは先ほど水沢さんもおっしゃったように、高度経済成長を体験したとき、あるいはまさに前のオリンピックのときですよ。あの高揚したお祭り感の中で迎えたオリンピックのときにおいては、みんなが人生の目的というものを共有できた時代だったですよ、ある程度。もちろん一人一人にいろいろな苦しみはあったろうけれども、1945年の時点から1964年という中であれだけのことを俺たちは達成したのだという、まさに達成した人たちがその祭りに参加するという高揚感を共有できた物すごい時代だったのではないかと今思うのですが、しかし、それが今なくなってきた。

そして、私たちはこの鳥取という場所を田舎だ田舎だと思うけれども、実はグローバル化の一番きつところというのは結局田舎に来るのですよね。つまり、私たちはグローバル化の最も風当たりの強い場所にいるという現状もあると思うのです。そのことの中でやはり私たちが人生のことについて深く考えるという場所を、いわゆる美術愛好家というだけではないいろいろな人が来て、何かちょっとふだん考えないことを考えたわというふうになるような場がくれるということは、すごく意味があることではないかなとお話をお聞きして思いました。

それで、塚田さんに改めてお聞きしたいのですが、とはいえ、アートの側から見たときに、いわば医療の側にアートが近寄って行って、利用している、されているというふうにも見える。福祉の側に近づいて行って利用されていると見えなくもない。そうすると、アートそれ自体の価値というのは必ずしも大事にされていないのではないかと、何かとの関係の中でアートの意味があるという話になってしまうのではないかと。うっかりするとアートの自己否定につながるのではないかとという危惧がささやかれることもあるではないですか。道具化にされてしまうという危惧がささやかれることもありますけれども、美術館を運営し、かつ多様な社会とかかわるプログラムを実践していく上で、一番大事な肝になるようなことというのはどんなことになるのでしょうか。

○塚田氏

一番難しい御質問をいただいてしまいました。私はとりわけ学校現場に出かけて行って、アートって何みたいな子供たちとつき合ったりすることが多かったので、それは医療の現場、福祉の現場とはまた違いますけれども、そういう意味で、こっちの土俵に全く乗らないけれども、何か持っていこうとしている人たちとつき合うことは結構今までも多かったです。

○中島教育委員長

どうしてももてなす側になるところがありますよね。

○塚田氏

そうですね。ちょっと、何ていうのですかね、そうですね。

○中島教育委員長

必ずしも甘いばかりではないけれども、甘くておいしいですよということばかり言うみたいな傾向が。

○塚田氏

そうですね。敷居を下げろ下げろというのが美術館業界では、もうここ20年ぐらいでしょうか、ずっと言われ続けていることなわけです。そして、私実感しておりますことは、敷居を下げ過ぎて落とし穴になっているみたいなことが往々にしてよくある。敷居をまたぐつもりが落とし穴に入って、行けなかったみたいな、結果的に届かなかったみたいなことが、極めて比喩的な言い方ですからわかりにくいかもしれませんが、そういうことは多々あると思うのです。

ですが、他方で思うことは、実はそれは教育プログラムを受ける側もわかっているのです。口では言わないけれども、察知しているなあということはおわかりです。つまり、こちらがこんなものかなと仮に思って提供した甘みの強いプログラムを受けた参加者は、そこそこの喜び方しかしない。それはひょっとしたら本人たちは自覚をしていないかもしれない。美術ってこんなものなのかな、まあ楽しかったなみたいなことで、本人たちはそんなものだろうと思っているかもしれない。ですが、こちらが、これは多少骨はあるし、そうそうごっくんとすぐに飲み込みやすいものではないけれども、これは栄養があると、自信があると思って提供したプログラムに関しては、やっぱり参加者の食べ方が違うのです。それはもう見ればわかるのです。ですから、こんなのはわかりにくいとか、お客さんが来ないとか、とりわけ子供というのはいい口実になりがちです。子供にわかりにくいからこんなプログラムはだめだとか。そういうのは大概プログラムを提供する側の甘えであり言いわけであることが多い。地味でも美術なら美術の、ある本質をちゃんと残したプログラムをつくれれば、それはどんな子供であれどんな大人であれそれはわかるというのが私の経験からの実感です。

○中島教育委員長

その本質を逃さないようにどれだけやるか。

○塚田氏

そうです。もうそれを、一旦もういいやと諦めてしまうと、坂を転がっていくように甘いおやつみたいなプログラムばかりになってしまいます。

○中島教育委員長

水沢さんはこの辺いかがでしょうか。

○水沢氏

恐らく、さっき生きる実感という言い方をして、それをやっぱり発見できる場所が美術館だという設定が必要です。発見というのは、提供する人間も発見していないと発見を共有できない。だから、予測不可能性の中で何か挑まないといけない。塚田さんが最初に言った、これからのプログラムというものがある。これまでのものをそしゃくして見せる。それはすごく啓蒙的、普及的、教育的だと。でも、生きるとか発見するということは、やってみないとわからない。美術館もそういうプログラムを用意するし、そもそも、今生まれている美術は、全部つく

っている当人たちもやってみないとわからないとやってやっている。だから、なかなか理解してもらえなくて、非常に困難な中であったりする。でも、それも一緒にプログラム、一緒に展覧会、一緒にワークショップをやることによって何か理解の糸口が見つかったら、それは企画した学芸員でも実は全部はわかるはずはない。一緒に発見する。その瞬間に生きていると思う。もっと発見したいと思う。そういう仕組みとして、ミュージアムとか、博物館、美術館というのは、過去であれ、実はそれは過去にも言えることなのです。過去というのは、何かわかって集積しているように思っているだけです。よく見るとわからないことだらけだということはすぐわかるわけですね。そういう意味では、これからこれまでも基本的には同じで、何かをそこから学び直さなければいけない、発見し直さなければいけないと。そういうことが生きることの充実をつくる。そのためには、美術館、博物館というのはもうまたとないところであると。過去のそういう努力の集積体ですから。そこを読みほくこともできるし、そこから未来へとジャンプすることもできる。そういう場所だと思います。

○中島教育委員長

ああ、なるほど、わかりました。

そろそろ皆さんに御意見をいただかなければいけないのですが、人口が鳥取県、最少県だということもあり、塚田さんは、鳥取県は島根県ではありませんからね、こっち側ですからね。よく覚えといてください、これを機会に。

いま一歩メジャー感のない県ですけれども、要するに今、人口減が続くというのは、やはり20世紀以来の、19世紀終わり以来の近代化の、産業化の歩みということの帰結として、地方から都市に人口が流入し、地方が衰退するということが起きているわけですね。ある種の文明史的な必然としてそれが起こっているということの中で、今の水沢さんのお話を捉えると、要するに、そういうこと自体を私たちは捉え直し、人口規模が少ない、寂しいけれども、しかし、私たちにとっての本当に生きる価値とは何かということは今、私たちは考え直さなければいけなくて、まさにその場として美術館を位置づけることができるのではないかというお話かなと思ってお聞きしました。

○水沢氏

より切実に問われている。

○中島教育委員長

そうですね。だから、私たちは、私たちのコミュニティはまさにそういう美術館であるならば、それは本当に我々のために必要なものだと言い切れるということですね。どうもありがとうございます。

では、今までの流れもくみながら、ぜひ客席のほうからも何か御質問等をいただければと思います。

では、先に挙げていただいた。

○会場発言

私、ミタニと申しますが、美術館についての一般論に質問があるのですが、余り時間がないということなので、県立の美術館についてお尋ねをいたします。

県立美術館は去年から、まずどこに建てるかということで、新築ありきで進められてきました。100億で建てるということで、そして維持費が3億9,000万ですか、かかると。そういう前提で建てる決めて、さあ、東部にするか中部にするか西部にするか、県民の皆さんどうだと、こういう話が来たわけです。ところが、5月に県議会の教育常任委員から、今、100億もかけて建てるのはおかしいではないか、県民のコンセンサスが得られていない、見直すべきだという意見が出て、途端にさっきの予測数を大幅に変更したわけです。100億とかけていたのを80億にしますと。それから、維持費は3億9,000万から3億2,800万

に減らしますと。きわめつけは、入場者数を20万人と最初見込んでいたのを、何と9万5,000人に減らしますと。まるでバナナのたたき売りではないですか、これでは。そうすることによって、新築を正当化しようという意図が、これは教育委員会ですか、見えました。

私、議会の先ほどの見直しをすべきだという意見、これを発言した議員の方には非常に拍手を送りたいです、敬意を表したいと思うのです。確かに、今こういう財政が逼迫している時代に、何で100億もかけてつくるのか。そこを根本的に、そこから私は県民と対話をしてほしいのです。はっきり言って見直しをしてほしいのです。そういうことをお願いします。

○中島教育委員長

この場にふさわしい議論かどうかというのがちょっとありますが、まずは、とりあえず私が答えるしかないのかな。とりあえず私がお答えしますが、今は、まずはつくるということが決まったわけではありません、そもそも。何が社会的投資に見合うかということ、何をつくる、それに対してコストが幾らだということが、目的とその手段がふさわしいものかどうかということ、これを皆さんに考えてもらうための、その考えていただくための場としてこの場があります。ですから……（発言する者あり）私しゃべっていますので、もうちょっとお聞きください。ですから、反対の御意見の方ももちろんいらっしゃっていいと思います。反対の御意見もあるのだなということも私たちも認識しているつもりですし、ただ、この場は皆さんに考えてもらうための場だということは御理解をいただけたらと思います。

どうぞ。

○会場発言

もうちょっと勉強してもらわなければいけません。そもそも今の博物館は、いいですか、石破二郎さんが知事のときに建てたものなのです。そのころあなたは県庁に入っていましたか。それで、石破さんが発案して、鳥取にも何かつくらなければいけないということで考えて、でも金がないので、とりあえず美術館と博物館と一緒にものをつくったのですよ、とりあえず。そして西尾知事の時代に、鳥取県もそろそろ余裕ができたので文化的なものをつくりたいという話になって、そのこの入り口のところに置いてありますが、このパンフレット、中部地区に燕趙園をつくったのです。相当な金がかかっております、燕趙園。そして、中国から専門家を呼んで中部地区につくったのです、燕趙園を。それで次は西部地区だと。西部地区に花回廊をつくったのです。これをつくるときには、西尾知事が担当者と一緒にヨーロッパのほうまで行って研究して、あの立派な花回廊をつくったわけです。それで、今度は東部だという話になって、いいですか、西尾さんのときに、当時の西尾鳥取市長との間に話があったはずで。それで、鳥取市は何回もこういう会合をやったのです、どこがいいだろうかと。何回もやった、この会合。そうしたら、その結論が、湖山池が見える桂見がいいということになって、鳥取市は5億円をかけて土俵をつくったのですよ。当事者同士は、担当者同士は了解を得られたと思いますよ、県も市も。5億円、この5億円の中には国の金も入っているということです。ところが、片山知事になって、選挙があつて、片山さんが桂見を見に行つたと。片山さんは岡山の人ですから、あそこはよくないと……。

○中島教育委員長

もう少し結論を。

○会場発言

ええ、結論言いますから。

○中島教育委員長

結論を。

○会場発言

言います。あそこはよくないと。それで、今は財政が悪いと言って片山さんは中止をしたのです。そして、今の平井さんが知事になる前に梨花ホールで演説会があって、文化団体の人が美術館を要望したら、それはつくりますと。つくるけれども、まだ財政が難しいので、しばらくは鳥取市内にある数カ所のギャラリーを使ってほしいということだったわけです。だから、ここにあるように、各市町村に呼びかけて12カ所も出させるという発想はないはずですよ。三朝も出した、倉吉も出した、そんなのが大体基本的におかしいのですよ。鳥取市ということは決まっているのですよ。だから、この間の県議会である議員が、凍結を解除したのなら鳥取市になるはずだと、そのとおりなのです。それをあっちだこっちだと言って、それはおかしい。それから、鳥取市……。

○中島教育委員長

では、一つポイントは、今、鳥取市でなければいけないということをおっしゃりたいのですね。それから2つ目をお願いします。

○会場発言

それで、もう一つは、美術館は、島根県もそうですが、松江にあります。ほとんどの県が県庁所在地にあるのですよ。北栄町だ倉吉市だという話ではないのです、これは。初めから県庁所在地ということで出発しているのです、ずっと前の知事の時代から。それを突然、これは知事部局がやればいい仕事なのですよ、教育委員会や博物館でなしに。観光客をたくさん呼んでこようという話だから、はっきり言って悪いけれども、博物館では無理です。観光客をたくさん呼んできて、ありていに言えば、もうかるようにしたいのですよ。大きな金は使いたくないと。それから、さっき言われた金額は、80億と……。

○中島教育委員長

では、2つ目が、鳥取市が県庁所在地だから、県庁所在地にあるべきだという2つ目の御意見ですね。では、2つぐらいにちょっと……。

○会場発言

金額、まだ大事な点があります。

○中島教育委員長

では、3つ、次で終わりにしてください。

○会場発言

金額は80億と出したら、県会議員に80億も使わなくてもいいではないかと。それで当局は、では60億にしますと、こういう話です。何で急に20億も減るか、金がないから減らすのだと。県会議員に言われたらすぐ変える。

それで、平井さんももうちょっと腰を入れてもらわなければいけない。鳥取市につくると言ったのだから、こんな12カ所も候補地を出させて、どこがいいですかという話。

それから、一番肝心なのは、土地代はどうなっているのですか、土地代は。県が買い取って県が払うのですか。建設をしたところに土地代を出させるのですか、ただで。その辺もおかしい。まだあるのですが。

○中島教育委員長

どうもありがとうございます。

このフォーラム自体、再三繰り返になりますけれども、建てるということが決まったわけ

でもありませんし、それで、やはり県立の建物ですので、どこに建てるのが一番いいかということ、これを専門委員会の方にいろいろ御議論いただきながら、県民の総意として、もし建つとすると、どういう場所に、どういう目的を持って、どういうコストで建っていくかということ、これが全体の総意として、民主主義のプロセスの中で決まってくることになると思います。そのための一つの機会がこの場であり、これからより多くの皆さんの議論を経て、そのことが定まってくるといふことだと思います。今の御意見も一つの御意見として賜りたいと思います。

では、ほかに、せっかくですので、塚田さん、水沢さん、検討委員会の方いらっしゃいますので、お二人にも答えていただける内容を、では、若い方にお願ひできますか。

○会場発言

済みません、スギモリと申します。よろしくお願ひします。

僕自身、絵を描いておまして、仕事のほうも、障害のある方がアートをするという職場で職員として働かせてもらっております。先ほどイギリスの例が出ていたのですが、結構福祉が絡んできて、そういうコラボとか、いろいろ地域とのかかわりが入ってきたということがあったのですが、うちの職場でもそういうワークショップなどをさせていただいておまして、例えば大学生の美術を学んでいる、学芸員の資格を取れるような美術を学んでいる方々がうちの利用者さんと一緒に地域でワークショップをしていただいて、いろんな方が来てくれるとかそういうのをさせてもらっておるのですが、今まで美術館、鳥取でいうと博物館になるのですが、博物館とかかわることがなかなか難しく、かかわるといふか、出るとしても、公募展とかそういうことしかかかわることがなくて、そういう取り組みしかできなかったのですが、いろんなことがしたいとか、こういうワークショップとか楽しいのになんかというときに、どう接触を図っていいかわからないですし、その費用もないですし、とても小さなところでやっているもので、職員も3人ほどしかいないようなことで、何かいいアドバイスがあったら、伺わせていただけたら幸いです。

あと、若者のアーティストと呼ばれる人たちも本当に美術館と縁がなく、もう距離が遠いというか。新しい美術館ができるときに、もしかしたらそういう感じでレジデンスなりなんなりかかわることができるというのも書いてあったのですが、何かいい方法があれば教えていただけましたら幸いです。よろしくお願ひします。

○中島教育委員長

ありがとうございます。

一つが、障害のある人の美術の活動を支援しているけれども、そういう活動と美術館というのはどういうふうにつながり得るのかということと、若い人の活動全般が美術館とどうつながるかという2点ですね。どう考えていらっしゃるかというのはありますが、塚田さんに、事例で、それを受けながら大場さんのほうで考えていただくということ。

では、塚田さん、お願ひしてもいいですか。

○塚田氏

恐らく一般論として、新しいものが始まる時というのは、仕組みがないわけですね。後ろ盾もありません。では、そういうところでどうして何かを実現するかと云ったら、それは個人と個人がつながるときにやはり実現していく、始まりができるのではないかと思うわけですね。例えば、先ほど御紹介したイギリスの事例でいいますと、障害者ではなく高齢者介護施設と美術館のコラボなどというものもあるのですが、それは上から、これからの時代は高齢者が大事だから高齢者の何かをやれと言われて始まったわけではないのです。美術館の、ある一職員が、自分のお母さんか誰かが高齢者施設に入っていて、とても非文化的で、もう悲しくてしょうがない。だから、自分が個人で何かできることはないかと思いついて、自分の知り合いの介護施設の方とお話をして出前みたいなことをやったということが、マンチェスターではある事例の始まりとしてあるのです。大概そういうものだと思うのです。それが長い時間をかけて組織

と組織のつながりとして形をなしていくということがあると思います。

うちの館の話でいいにしても、大学生のインターンが小学校に出前授業をするというのも、一担当者と一大学の先生のいわば思いつきで最初は始まって、何の後ろ盾もありませんでした。学生は完全にボランティア、単位にもならない、交通費も何にも出ない、美術館も何もしてあげられない。しかし、おもしろそうだからやらないかと言って始まって、それが15年たつてようやく大学側に認められて、単位を上げるみたいな話になったということがあります。ですから、始まりはやはり個人と個人、信じられる個人がいるかということ。それが組織のレベルの話になるのはまた別問題ですけれども、10年、20年の覚悟を持ってやれば、それが組織レベルの話になるということなのかなと思います。

○会場発言

ありがとうございます。

○中島教育委員長

大場さん、どうですか。

○大場館長

済みません、先ほどのお話ですけれども、現在の構想の中に、あるいは事業の取り組み、新しい美術館になったらこういうことをしたいという取り組みの中に明確には書いてないと思いますが、現在でも博物館のほうからいろいろ出かけていって、美術に関するいろいろ、体験なりなんなりしていただくという取り組みはやっておりまして、そういったことを今後は特に地域とのつながりを深めるという意味で強化していきたいと思っていますので、そういうお話を、特にいろいろ言っていただければ、どんどん広げていきたいと思っていますので、よろしく願いいたします。

○会場発言

よろしく願います。ありがとうございます。

○大場館長

それで、先ほどお話がありましたようなことは、今この場では、できたらパネリストの皆さんとの意見交換をしていただけたらと思っています。我々のほうはこの会が終わった後も、表のほうで待っておりますので、そこでいろいろ意見交換をさせていただければいいのではないかと思いますので、今はパネリストの皆さんとの意見交換のほうを重点的に願います。後ほどおいでください。

○中島教育委員長

どうもありがとうございます。

○会場発言

ありがとうございました。

○中島教育委員長

でも、10年、20年と言われても困ってしまいますから、ぱっぱと行きたいですね。
(発言する者あり) (拍手)

では、ありましたように、パネリストの方にも答えていただけるような質問をお願いしたいと思います。

では、願います。では、もう、ちょっと時間が過ぎていきますので、最後の質問とさせていただきます。

○会場発言

失礼します。なるべく短くしたいと思いますが、長くなったらごめんなさい。

まず、質問ですが、きょうのフォーラムのこの会場において、検討状況の資料というのが、私、あるかな、もちろん概要で結構ですけれども、それは配布されているかなと思って来たのですが、それが何か見当たらないので、まず、それが前提ではないかと思います。フォーラムでディスカッションをする以前に、構想は、言いましたように概要でいいのですが、こんな構想を持っていますよという、もちろん現段階で、そういう資料を配布していただけたら、よく皆さんに御理解がいただけたのではないかと思います。

それから、建設場所をめぐるっては、確かに最初の方がおっしゃいましたように、いろんな政治的な取引とかいろんなことがあったと思います、過去には。それはそれとして、やはり鳥取県の美術館ですから、だから、過去にどういう約束があった、取引があったということではなくて、鳥取県の県民のためにはどんな美術館になるべきか、どこにあるべきかという議論を深めて、県民のコンセンサスを得てそこで決定する。もちろん最終的には県議会が決定するのですが、それが正論だと思います。どこがいい、どこが悪いと私は言いません。ただ、最初ほどもありましたように、県庁所在地に全国的にあるから県庁所在地にあるべきだという考え方は、はっきり言って間違っています。県庁に絶対なければならないという理由は一つもありません。私はそう思います。

それから、県議会で議論があつてということは、当然、県議会の議員さんの方は財政上を考えていろんな意見をお持ちだと思う。それは当然だと思いますけれども、ただ、財政ありきでこの美術館構想を考えるべきではないと私は思います。それで、最終的には県財政とのすり合わせで鳥取県内に合った美術館をするべきだと思います。ただ、それは建物は、適当に申し上げますとそこそこといいですか、普通でいいのですが、どちらかといえば管理運営に充実し、お金をかけてやっていただきたいと思います。

それから、私も美術に対してそんなに認識があるわけではないですが、ただ、立派な県内外の作品を見に行けばいいということではなくて、それも当然重要ですけども、県民のための美術館ということである以上は、県民から遊離した美術館ではなくて、県民の作品をふんだんに展示するとか、それで、その美術を通してフォーラムを開くとか、そんなことで県民が足を運びやすいような運営にしていきたい。ただ、それは、先ほどありましたように、姿勢を低くして県民に迎合するようなことではなくて、確固たる理念を持って運営しながらも、県民に支持される美術館運営にしていれば。凍結されたものがいろんな事情で再燃をして、皆さんが真剣に検討しようかということになっているのですから、そんなに財政上苦しいからだめだとかそんな簡単なことではなくて、真剣に議論して、私はどちらかといえば建設の方向で進んでいければと思います。以上です。

○中島教育委員長

どうもありがとうございます。

では、今のも御意見として承ります。初めの配布物はお渡ししていなかったですかね。（発言する者あり）そうですか。では、それが渡ってなかったと思うので、不手際は御容赦ください。

それでは、大場館長のほうから、今後の流れなどを少し御説明いただいて、一回締めたほうがいいですかね、こっち。いいですか。

○大場館長

今もいろいろ御意見をいただきましたけれども、今の意見も含めて、この会場でいろいろ御意見をいただきました。このフォーラム、西部、中部と開催してきました、本日で一応一めぐりという格好で考えておりますけれども、これで県民の皆さんからの意見が伺い切れたとは思っておりません。本日も時間がなくてこういう格好になっておりますので、この後でもまた意

見を伺いますけれども、そのほかにも多少もうちょっと小ぢんまりとした範囲で、ミニフォーラム的なことを各地で開催してまいりたいと思っておりますので、そのときにでもまたいろいろ出ていただいて意見を賜ったらと思っております。

先ほど来、委員長の方からいろいろ申し上げておりますように、今回の美術館検討については、県民の皆さんの御理解をいただけるような美術館をつくりたいというのを基本にしております。前回凍結になったのも、最終的には県民の皆さんの理解が十分でなかった、十分に理解をいただけないままに行政のほうで粛々と進めてしまった、そこに原因があると考えておりますので、皆さんからいろいろ御意見をいただきながら、県民の皆さんに支持していただけるような内容のものを取りまとめた上で、考え方を整理した上で向かっていきたいと思っております。

今のこの委員会で議論していただいております構想は、皆さんにその材料を提示する、要するにそういう判断をいただくために必要な材料を提示するためのものがございます。この委員会で、基本的に今度美術館をつくるのだったらこういう美術館がいいではないかと、こういう美術館というのはこういう理念で、こういう場所に、この程度の規模で、この程度のお金をかけてつくるといふ基本的なところを明らかにした上で、そういうことでどうでしょうかというのを皆さんにお尋ねする形をとって、それで、皆さんが進めてもいいということで理解をいただけたら進めていくというふうにしたいと思っております。

そういった意味で、今後、秋ぐらいになるかもしれませんが、意識調査、アンケートみたいなこともしたいと思っております。そういったものを踏まえて、最終的には議会に判断していただくということになるだろうと思っておりますので、そういう意味で、本日のフォーラム、あるいは今後いただく皆さんの意見を踏まえてやっていきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

○中島教育委員長

どうもありがとうございます。

きょうもいろんな御意見をいただきありがとうございました。どうしても関心のある人の輪からこの議論が広がっていかないようなところがありますので、ぜひ身近な方にも、この美術館を、みんなの美術館をみんなで考えてつくることが、今、館長が申し上げたように一番大事なことかと思っておりますので、この場にいらっしゃる皆さん、ぜひこれからもいろんな形で御意見を賜り、御協力をいただけたらなと思っております。

それから、パネリストの皆さんも、きょうは短い時間で大変恐縮でしたけれども、塚田さんにもいろんなお話をお伺いし、水沢さん、田村さん、来間さんにもいろいろ貴重な御意見いただきました。本当にありがとうございました。

では、このパネルディスカッションは以上で終了したいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

○司会

ありがとうございました。

本日、基調講演をいただきました塚田様、それからパネリストの皆様に、もう一度盛大に拍手をお願いいたします。（拍手）

この後ですけれども、館長からも少し説明がありましたが、外のロビーにて、意見・質問受付コーナーを学芸員が行います。まだまだしゃべりたかったと思われる方もいらっしゃると思いますので、ぜひそちらにもお立ち寄りください。コーヒーを御用意しておりますので、コーヒーを飲みながらいろいろ議論ができたらなと思っております。本日は本当にありがとうございました。また、アンケートの御協力、ぜひよろしく願いいたします。ありがとうございました。